



元第65代横綱・一代年寄貴乃花親方

貴乃花光司_{さん}

今月号のリブライントビューは、相撲界の寵児、貴乃花光司さんです。現役時代は平成の大横綱として、現在は貴乃花部屋親方として、相撲界を盛り上げようと奮闘されています。現役時代のストイックな姿勢、相撲道に対する確固たる信念、相撲の普及に向けた熱い思い…。謙虚に語る貴乃花親方の人柄には、人を惹きつけてやまないものがありました。

（聞き手・構成：石原 修，町田弘香，岩崎孝太郎）

1 幼少期

——小さい頃から相撲がお好きでしたか。

父が力士だったので、相撲に囲まれた環境で育ちました。弟子とは違う部屋でしたが、同じ屋根の下で生活していました。

ですから、相撲は生まれたときから当たり前にあった存在で、もう好きとか嫌いとか、そんな感情はないですね。

——幼少期から力士を目指して？

そんなことないです。最初はそんな気持ちは全然なく、力士になりたいという気持ちは、中学の3年くらいから芽生えてきました。当時は、学校の勉強にはあまり関心がなく、それよりも力士になって修行した方がいいと思うようになっていましたね。

——貴乃花親方にとって、先代の親方はどのような存在でしたか。

父は、半年は巡業とかで家にいませんでした。私が力士になるなんて思っていなかったでしょうから、とにかくどこに出ても恥ずかしくないように、食べ方、

挨拶とかしつけには厳しかったです。食事をするとき、にこやかに食べたことなど1度もなかったです。

2 現役時代

——初めて関取になったとき、どのようなお気持ちでしたか。

気が付いたら関取に上がっていたという感じで、関取になった喜びやそれまでの苦しきなんて、考えている余裕なんか全然なかったですね。朝から晩まで相撲漬けで、緊迫した毎日でした。トイレに入っても鍛えることを考えている状態、もう精神錯乱状態でしたから。

——その強い気持ちはどこから生まれたのですか。

先代が大関で終わったというのは、私のハングリー精神ではありましたが。それに、私には他の力士と違って、相撲をやめても帰る場所がなかったんです、ここが実家でしたから（笑）。だから、5年経って十両になれなかったら、親元を離れて生活しようとけじめをもってやっていました。やっぱり、師匠の息子が強くなれなかったら、師匠としてもかわるいすし。

——最年少記録で昇進し続けました。

記録とかには全く興味なかったです。相撲界は、力の世界なので、力さえあれば上がっていけるんです。だから、ここで絶対生きてやるんだって、そのことで頭がいっぱいになりながら必死に頑張っていましたね。

当時、私は無愛想無愛想ってよく言われたんです(笑)。でも、記者にいい顔するとか全く考えなかったですね、自分の相撲道に何の関係があるんだという気持ちでしたから。取り上げられることのコンプレックスというか、もう私に関わらないでくれ、という気持ちが強かったです。今は、相撲の普及を考える立場になりましたから、そんなことは思わなくなりましたけど。

——ハワイ勢との戦いは世を沸かせましたね。

土俵に上がって向こうの景色が見えないというのは、小錦、曙、武蔵丸の3人だけでしたね。体からして違いましたよ。

——恐怖心とかはなかったですか。

恐怖心すら感じる余裕がなかったですね、ただ向かっていくだけ。大きい人とやるときは、ちょっとでもよけると飛ばされちゃうんです。だからとにかく向かっていくだけでした。相撲はどうしても大きい人が有利なので、逆手に取るような相撲の取り口が必要なんです。ただ、あの3人はそこもすごく器用でしたから大変でしたね。

——横綱になったときのお気持ちは？

横綱になるより、なってからの方が大変でした。上を目指すことで、(現状を)維持することができるんですが横綱には上はありませんから。横綱は常に12勝以上しなくてはだめ。でも幕の内の力士で横綱とあたるのは強い人。ちょっとの油断で横綱も簡単に負けてしまうんです。横綱は毎日勝たなくてはいけませんが、相手は横綱に勝てば他は全部負けてもいいくらいの勢いでくるんです。金星は給料に上乘せされますし。横綱時代は、精神的なものが培われましたね。

3 親方として

——現役時代との一番の違いは？

力士は体格も得意技もそれぞれバラバラですので、その力士の体格や得意技、癖を考慮に入れた上で、最も合理的な戦い方を学ばせていく必要があります。簡単そうでこれがまた難しいんです。今は13人の弟子がいますが、13通りで教えなくてはなりません。自分でやった方がはるかに楽です。

——一番苦労していることは？

相撲人としてまとめることですね。人種も育った環境も差別は一切なし、ただ相撲人であることでの家族というかファミリーというものを掲げてやっています、1つにまとまってね。

相撲は1人じゃ稽古できないんです。相手に胸を出してもらって押す力をつけていく、儀礼の社会です。同部屋の力士は、仲間だけれども雌雄を決する相手でもあります。相撲は頭と頭がぶつかる競技で、首の骨折で死ぬということも起こるんです。なあなあになると、稽古も友達感覚になってしまう、だからオンとオフの切り替えについては、うるさく言っていますね。私の兄弟子にもいましたが、首の骨を負傷すると、どんなに素質があっても相撲を取ることはできないですから。

——稽古は本当にハードですよ。

成長していく過程できついかつらいと思う、そういう環境に追い込むことが親方の仕事だと思っています。五体満足で生んでもらったことへの感謝の気持ちがあれば、体が不自由で相撲を取りたくても取れない子がいるのに、きついって言われるかって。

——厳しい世界ですよ。

十両に上られるのはごくわずかです。まだ十代で先が長い子が多いですから、チャレンジ精神といいますか、戦う精神を宿していきます。そのためには汗をか

くことが大事なんです。汗をかかないと気持ちが盛り上がらない、四股もいい加減に踏んでいると汗も出てこないですから、厳しく言いますね。

若い子はパワーがあり余ってますから、稽古でくたくたにさせないと。遊ぶ余力は残させないようにしています。シーズンオフがない世界ですので、休みも稽古だと言います。師匠の前でできないことは、師匠がいないときもするな、と言ってはいます。

——若い子は、稽古に家事に大変ですね。

そうですね。ただ、食事については、他の部屋の多くは強い者から順番に食べていきますが、うちの部屋では、下の弱い者から食事をさせています。あまりがつがつとさせないため、豊かな心で強くなれ、強くなると人にも優しくなれるから、とね。

——最近相撲離れもあり、弟子の勧誘が大変そうですが。

うちは自ら入ってきた子ばかりで、勧誘はやっていないんです。来る者拒まずの気持ちです。ただ、全体的には、部屋を持っている方では勧誘をやっていらっしゃる方が多いみたいです。でも、スカウトした子は長続きしないんです。名もない子の方が伸び率は高いというのはあるんです。学校の監督で仲の良い人からの紹介とかはありますが、他の相撲部屋で誘っていたりしてややこしくなるのも嫌ですし。

——新弟子採用のときは、何を大事にして採用しますか。

やる気、目線ですね、これを見ます。相手の目を見て話せる子というのが第一条件です。でもほとんどということないですよ。だって、私のところに来ること自体相当根性がいると思いますから（笑）。

——新関取が誕生しました。

15日間戦いますので、今度落ちるかもしれないという危機感があり、手放して喜ぶわけにもいきません。とにかく上げたら落とさない、追従する子を作る、これからが本当の勝負という感じ、苦勞するところです

ね。特に早いとも遅いとも考えていませんが、部屋をつくってから新関取が誕生するまで8年という期間は、親方業としては長い方でしょうね。

ただ、私としては焦ってなくて、13人のうち5人でも6人でも関取になればいいと思っています。当初から弟子は15人以内に抑えていました。1人1人を大切に育てるために。私が現役のときは部屋に40人強もいましたから。

4 これからの相撲界

——サポーター制度を始められました。

古来、相撲は地域に密着したものでした。勧進相撲など地域のために役立つものだったり、巡業で訪れることがきっかけで神社仏閣ができたとか。それをまずは自分の部屋からやろうと。具体的には定期的な親方便りとかですね。

——相撲界も変わっていきますね。

フェイスブックで相撲を紹介しろよとか言われるんですが、フェイスブックは分からないんです（笑）。

フェイスブックに限らず、相撲をもっと知ってもらうのがいいんじゃないかって言ってもらいますが、単にお金を集めるのは苦手で、人間として大事なものが失われていくと、ニーズとしても合っていないし、将



貴乃花部屋の稽古風景。写真左手前は貴乃花親方



うちの部屋では、下の弱い者から
食事をさせています。

豊かな心で強くなれ、強くなると
人にも優しくなれるから、とね。

貴乃花 光司

来的な後につながるようなものではないと思ったりしてね。あれこれ言われますよ、変わった事して、とかね。でも、跡を継いだ以上は地道に10年、20年続けていくのに困らない手法でやっていきたいと思っています。後に困るんだったら、先に困った方がいいだろうとね。

—— 女性にも相撲が広がっていますね。

小学生のわんぱく相撲ですと、女の子の参加者が多くて、男の子より強かったりしますね。女性の国際大会もあります。相撲を取らなくても、四股の動きはとても理に適ったものなので、エクササイズとして座る仕事が多いオフィス勤めの方にも広まっていますね。

—— 四股エクササイズですか。

四股は教科書にも名前がついていないような細かい骨格筋を整えてバランスを取る動きですので、やればやるほど足が震えてきます。女性の方を集めてサロンも実際に行っていて、「毎日やっています～、7、8キロ痩せました～」とか言われたりしていますよ。

—— 相撲は素晴らしいですね。

スポーツであり、伝統であり、文化でもあります。

二千年以上も前からあるものですし、国盗りの話でも相撲の勝ち負けで決めるというような話もあるほど人々に根付いてきたものです。これからは、オリンピック種目にもなるでしょうが、スポーツだけでは語れないものが相撲にはありますね。

—— 最後に夢を教えてください。

個人的にはもう横綱までやらせてもらったので、夢なんて（笑）。弟子と元気に暮らしていくことです。そして、相撲の認知度を高くしたいですね。相撲をもっと知らしめるべきという思いは強くあります。それに、相撲の組織改革ですね。変えてはならないこともたくさんありますが、もっと新しいこととか取り入れていきたいです。考えれば色々出てきますが（笑）、なにか、大上段に目標というものを掲げるのではなくて、普通に日々やるべきことをこなしていく中で相撲界の人たちの喜ぶ顔を見ること、これが夢ですね。

プロフィール たかのはな・こうじ

1972年生まれ。東京都出身。元大相撲力士、第65代横綱、優勝22回。現在は一代年寄・貴乃花として、貴乃花部屋の師匠。日本相撲協会の理事で大阪場所担当部長。